

# 「令和」の選定理由となった万葉集の抜粋

令和は、「大化」（645年）以降、  
248番目の元号となる。万葉集の  
「梅花の歌32首」の序文にある  
「初春の令月（れいげつ）にして、  
氣淑（きよ）く風和ぎ、  
梅は鏡前の粉を披き、  
蘭は珮後（はいご）の香を薫らす。」  
の文言を出典とした。

万葉集は20巻からなり、主に7世紀から8世紀頃にかけて詠まれた約4500首が収められている。

和歌に漢文の序文が付けられているのは、中国・唐代の初め、漢詩に序文を付けることが流行した影響による。「32首」の序文は、和歌が詠まれた梅見の宴の様子を説明している。この宴は、大宰府（現在の福岡県）に赴任中の貴族、大伴旅人の邸宅で、天平2年（730年）の正月に設けられた。

万葉集に詳しい上野誠・奈良大学教授によると、

「初春の令月にして、氣淑く風和らぎ、梅は鏡前の粉を披き」の「令月」は「万事をなすのによい月」で、「よい月に天気がよく、風も優しく梅が咲いて」という意味になるという。

上野教授は、「平成は地震などの災害が多かった。

『令和』にはおだやかな時代になってほしいという願いが込められているのではないかと分析する。

中国文化学者の加藤徹・明治大学教授は「『令』はもともと神様のお告げのことで、クールで優れているという意味」と解説する。

加藤教授は「令和」という組み合わせは「熟語としてもあまりないと思う」と語る。

一方、「令月」と「和」という組み合わせは、後漢時代の張衡の詩「帰田賦」の「仲春令月、時和氣清」など中国の漢文集にもあると説明する。

出典：Wikipedia

※「万葉集」の三十二首、  
「梅花（うめのはな）の歌」より